

## [特別講演記録]

# Publish Without Perishing を目指して

谷本 寛治

## 要 旨

若手の研究者 (Early Career Researcher) にとって、研究成果を論文にまとめ出版することは、チャレンジングなことであり楽しみでもあるでしょう。学位を取得し、就職することは容易なことではありませんが、それは最終目標ではなく、研究者として進んでいく第一歩です。本稿では研究には何が求められ、論文を出版する際には何が求められるか、基本的なことをまとめておきたいと思います。研究・出版圧力につぶされることなく、楽しみながら研究に取り組み、出版していく、1つの手引きになればと思います。

## 1. はじめに

出版しなければ去れ (Publish or Perish) という言葉があります。どのように論文を書いて出版すればよいか悩んだり、どのジャーナルに出版しているかが問われ出版しても評価されなかったり、さらに出版圧力に耐えきれず、消耗してしまうかもしれません。Publish and Perish にならないよう、研究の基本的作法を大学院生の間にみんなで確認していこうというのが今日のテーマです。

大学院生は、論文を書き、ジャーナルに出版し、学位を取得し、そして就職することを目指しています。今ではランク付けされたジャーナルでの出版と、研究機関での採用、昇進が一体のものとして制度化されており、この物差しで評価されざるを得ません。

しかしながら、研究、出版をキャリアアップの手段としてだけみていると、その営みはだんだんつらくなり続かなくなります。つらくなったら自分は何のために研究しているのか、そもそもなぜ研究者になろうとしたのか、最初の志を見直してほしいと思います。

本稿の内容は、私がエディターとして、あるいはレビュアーとして様々な論文とかかわっていたことや、ドクトラルワークショップでコメントをしてきた経験や、これまでに出版されたいくつかのガイドブックなどをもとにまとめています。基本的な内容は、谷本 (2021) をベースにしています。

以下では、3つのパートに分け、論文を書くこと、出版すること、そして研究者としての

心構えについてお話ししていきます。

## 2. 論文を書く

### 2.1 4つの問いかけ

論文を書くにあたって、Devinney (2014) は、次の4つの基本的な問いがなければならぬと指摘しています。

- ①誰に読んでもらいたいのか (To Whom?)
- ②何を伝えたいのか (What?)
- ③読者はなぜそれを読まなければならないのか (Why?)

それは誰に、何を伝えたいのかということとかがかわってきます。読む側に対して、そこに何か面白いこと、参考になることがあるということを示せなければなりません。

- ④どのようにそれを伝えたいのか (How?)

アカデミックな世界において、それぞれの分野での共通の言語、コンセプト、理論を使って議論をしていくわけですが、自分は意義があると思っても、他の人が関心をもってくれるとは限りません。

したがって、この「誰に」「何を」「なぜ」「どのように」の4つを常に意識し、研究に取り組むことが大切です。Gastel and Day (2016) は、「科学的なコミュニケーションは双方向のプロセスである」と述べています。一人よがりではアカデミックなコミュニケーションは成り立ちません。もちろんジャーナルの審査も通りません。

### 2.2 論文の構成

まず論文のタイプを、ScholarOne Manuscripts\* に示された類型を参考にみてみましょう。

\*Clarivate Analytic 社がつくったプラットフォームで、投稿者は原稿を提出し、エディターはレビュアーにレビューを依頼したり最終判断を示すなど、レビュープロセス全体を管理しています。

ここでは基本的な論文として、5つのカテゴリーを示しています。①研究論文 (Research Paper) 調査・分析に基づくもの。②コンセプチュアル・ペーパー (Conceptual Paper) 哲学的議論や先行研究の議論を通して仮説を鍛えるもの。③ケーススタディ (Case Study) インタビューなどによって具体的な事例を描写するもの。④文献レビュー (Literature Review) 特定のテーマに関する先行研究を網羅し整理するもの。⑤事象レビュー (General Review) ある現象について全体像を示したり、歴史的検討するもの。

以下では、①の研究論文について考えましょう。論文には、基本的な構成があります。

①	Introduction
②	Review of Previous Studies
③	Hypothesis
④	Methodology
⑤	Data Collection — Analysis
⑥	Discussion
⑦	Conclusion

### ① イントロダクション

まずこの論文で何を明らかにしようとしているのか問題提起をします。基本的なリサーチクエスチョンの設定です。研究のもつ意義、重要性を明確に提示します。執筆の際には、初めはラフスケッチにとどめ、全体を仕上げた後からもう一度イントロダクションに戻って書き上げると良いと思います。

### ② 先行研究のレビュー

当該研究領域において、過去どのような議論があったか整理し、そこでどのような課題、リサーチギャップがあるのかを示します。

### ③ 仮説の設定

文献レビューを踏まえて、仮説を設定します。

### ④ 研究方法

今回のリサーチにおいてどのような方法が相応しいか、適切な方法を明確に示します。

### ⑤ データ収集、分析

データを集め、分析する。エビデンスベースのリサーチが求められます。

### ⑥ ディスカッション

その分析結果に基づいて何が明らかになったのか、仮説の検証を行います。

### ⑦ 結論

初めに示したリサーチクエスチョンに答え、何が明らかになったかまとめます。その上で理論的、実務的インプリケーションを提示します。今回の研究上の限界や課題も示します。

## 2.3 よくみられる問題点

様々な論文をレビューしていると、いくつかの共通した問題点がみられます。7つにまとめましょう。

### ① 何を明らかにしたいのか不明確

明確なリサーチクエスチョンが立てられていない。何を明らかにしたいのかが明確にしきれていない。良い問いは、論文の存在意義を決めます。

②関係する先行研究のレビューが不十分

研究テーマにかかわる論文が適切にサーベイされていない、十分にレビューできていない (under-references)。当該領域で重要な議論が押さえられていない、先行研究における問題点やギャップが明確になっていないなど。

③先行研究のレビュー部分と調査・分析の部分がつながっていない

先行研究のレビューを踏まえて、理論的な視点、仮説を立てていくのですが、調査・分析とそのつながりが明確でないことがあります。これまでの議論にどのような貢献がなされるのかを示す必要があります。何のために先行研究をレビューするのか考え直しましょう。

④調査の方法・分析が適切でない

仮説を検証するにあたって、適切な方法・分析がなされていない。例えば量的調査であれば方法やアンケート調査の設計は適切か。質的調査であれば、適切なインタビューができているのか、十分な資料的裏付けができているか、などよく確認することが必要です。

⑤分析—議論—結論が繋がっていない

データを分析した結果から、統計的に有意な関係性が示せていない、結論が論理的につながっていない。データ分析と結論の間にジャンプがないか。

⑥研究のインプリケーションが明確でない

最終的にこの研究を通して、どのような理論的な貢献があるのか、あるいは実務的な貢献があるのか示せていない。

⑦読みやすい文章で書かれていない

日本語であれ、英語であれ、不明瞭な文章では人に理解してもらえません。英語で書くことは、外国人にとっては簡単なことではありません。自信がない場合は、専門家によるチェック (proofreading) は必要だと思います。英語論文の書き方を解説したガイドブックも参考になります (中谷 2020 など)。Gestel & Day (2016) は、正確で理解しやすい論文を書くことは、研究それ自体と同じくらい重要であると指摘しています。

## 2.4 理論的な貢献

ところで、研究論文は単なるデータ分析、事例紹介、地域研究にとどまるものではなく、理論的な貢献が求められます。そこで理論的な貢献とは何か、Crane et al (2016) を参考に考えてみましょう。

1つ目は、既存の研究を超えて新しい理論を提示すること。特定のコンラキストを超えて、新しい視点を提示することです。それはなかなか容易ではありませんが。

2つ目は、既存の理論をより発展させることができること。例えばアングロサクソン系の経済社会をベースにしてつくられた理論が、それ以外の国・地域の中のコンテキストにおいても説明力をもつ新しい可能性を示すこと。

3つ目は、既存の理論の適応性を新しいデータや方法によって説明力を広げることができること。それも理論的な貢献になると言えます。

新しいオリジナルな理論を提示することは理想ですが、実際にはこれまであまり議論されてなかった点を見出し、そこをきちんと説明できれば意義があります。

ここでディシプリンについて考えておきます。ディシプリンとは、それぞれの学問分野にある体系のことです。どういったディシプリンに基づいた研究なのか、大きく言えば経済学なのか、社会学なのか、政治学なのか、心理学なのか、まずは基本的な自分のディシプリンをしっかり身につけて勉強した上で、その理論的な枠組みをベースに分析していくことが大事です。

その上で、現実の現象というのは非常に複雑であり、どう分析すれば良いのかという問いにぶつかります。グンナー・ミュルダールというノーベル経済学賞を得た経済学者は、現実の社会には、経済学的な問題とか社会的な問題とか心理学的な問題というものがあるわけではなく、単に問題があるのであって、しかもその問題は非常に複雑である、と言っています (Myrdal, 1972)。それをわれわれが一つのディシプリンで切っているわけですね。もちろんそこから漏れ落ちるものがあるだろうから、どのような限界があるのかということを理解した上で、議論を行うべきです。

複雑な現象をどう分析するか、Interdisciplinary あるいは Transdisciplinary な方法が必要だと言われています。例えば、サステナブル・ディベロプメントにかかわるさまざまな問題は、経済、環境、社会の議題が複雑にかかわりあっており、単純にクリアにカットできません。そのため Transdisciplinary な方法論が求められています (Schaltegger et al, 2023 など)。

ただ初めから Transdisciplinary な視点を組み立てようと試みるというより、まずは基本になるディシプリンをしっかり身につけた上で、その先ディシプリンを超える視点が必要ならば自分で考えていけば良いと思います。

### 3. 論文を出版する

#### 3.1 ジャーナルの選定

論文がまとまったら、次の課題はどのようにして出版するかということです。まずはどのジャーナルを選ぶかというところから始まります。それは、誰に、どのように、論文を伝えたいか、ということとかかわってきます。その上で、伝統的で定評の高いジャーナルは、インパクトファクターが高く、採択率はとても低いです。例えば10%もない採択率ということは100本の論文が集まってきても8、9本しかパスしないということですよね。基本は、

SSCI (Clarivate 社の Social Science Citation Index) のジャーナルなのかどうか、その位置づけを見極めた上で、選択する必要があります。さらに、それぞれの分野で専門化したジャーナルが時代の要請とともにたくさん生まれています。新しいジャーナルはまだ歴史が浅い分、ポイントは低く、ハードルも相対的に低いとは言えるのですが、ジャーナルによってはしっかりした審査・編集の基準を設けていて、この 10 年、15 年のうちに高い評価を得てポイントも高くなっているものもあります。

地道に論文を書き、出版する。しっかりと論文を書くことの積み重ねの中で、より定評の高いジャーナルにも投稿していくことが可能になっていくと思います。

もっとも、インパクトファクターの高いジャーナルに論文を掲載し、CV のインパクトを大きくすることが研究の目的ではなく、自分の研究領域の中で少しでもインパクトを与えることができたか、何か新しく付け加えることができたのかということが、とても重要なことだと思います。

### 3.2 レビュープロセス

次に、投稿するプロセスについてみていきましょう。各ジャーナルはウェブサイトを持っていますから、まずその Aims & Scope のページを確認してみましょう。そのジャーナルの守備範囲が書かれています。自分の研究テーマがフィットしないジャーナルに出してもそれはアクセプトされません。まずは、ジャーナルのウェブサイトを見て、このジャーナルが求めている論文はどのようなものなのかチェックしましょう。

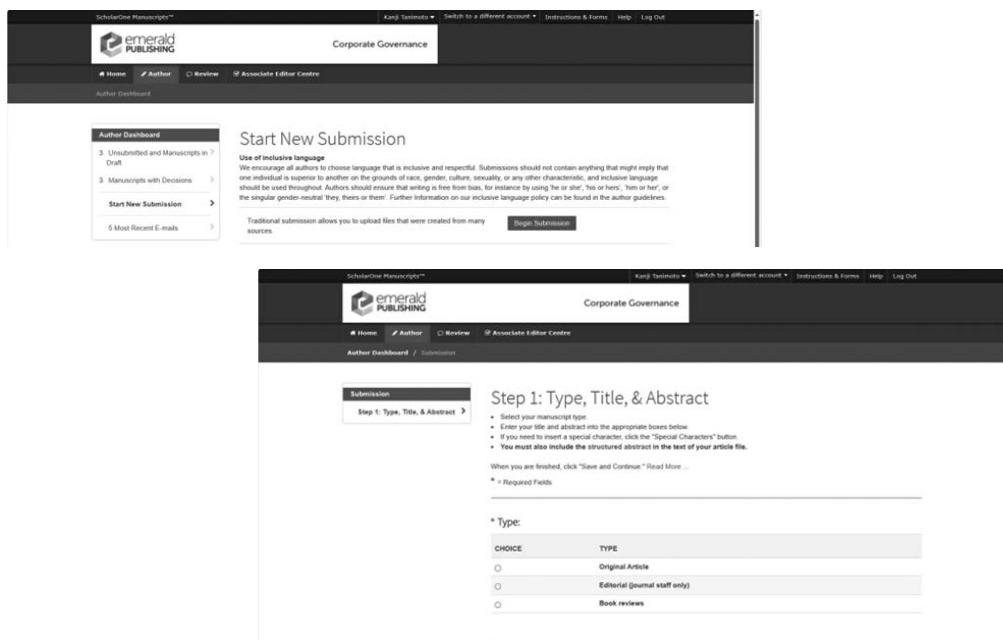
目指すジャーナルが定まれば、Author Guideline を見て、論文のフォーマット、文字数、図表、注、文献の示し方など、注意深く確認します。ジャーナルによって細かな形式が異なりますので注意しましょう。

それが出来上がれば、次に登録をします。論文提出のページ (Submit your paper) から入ります。以下の図は Clarivate 社がつくっている ScholarOne Manuscripts というプラットフォームです。メールで論文を送るのではなく、各ジャーナルにプラットフォームがあり、そこにまず自分の登録をして、論文をアップします。その際、研究・論文作成にあたっての倫理基準や「人を対象とする研究」の倫理審査、さらには生成 AI の利用原則などが示されていますので、よく確認しておきましょう。

エディターである私たちも、全てこのプラットフォーム上で論文を受け取って、レビューアーを選出し、依頼し、その結果をここを通して投稿した人に返します。

ところで、ジャーナルはスペシャルイシュー (特集号) を設定することがあります。それが自分のテーマとフィットしているとそこに出してみるのも一つのやり方です。ジャーナルが重要だと考えるテーマの特集号に論文が載ることは、注目を集めることにもなります。特集号には、締め切りがあっていつ発行するか明記されていますので、レビュープロセスが決

図 1 ScholarOne Manuscripts



められたスケジュールの中で動くというメリットがあります。

ウェブサイトを見ると、Editorial Team というページがあり、どういった人たちが編集に携わっているか確認できます。全エディターの名前と所属機関が出ていますから、それを見て自分が提出するにふさわしいところかどうか見るということもできます。Editorial Advisory Board/Committee というのもあります。彼らは監督・サポートをするような役割で、原稿をハンドリングするわけではありません。論文をレビューすることはあります。どういった人たちがこのジャーナルを支えているのかを見ると、ジャーナルの雰囲気やレベルも見えてくると思います。

Editor-in-Chief が 1 人あるいは 2 人いて、Associate Editor が 10 人から 20 人ほど、広いテーマを扱うジャーナルだともっといますし、中には分野 (section) を分けてそれぞれに担当エディターを設けているところもあります。

エディターは論文を受け取ったら、内容を確認、レビュアーを 2 人ないし 3 人探し、依頼します。ダブルブラインドレビューとは、投稿した人は誰がレビューしているかわからないし、レビューしている人も誰が書いた論文なのかはわからないというシステムです。わかっているのはこの間に立っているエディターだけです。

ただ、投稿すれば必ずレビューしてもらえとは限りません。Desk Reject ということもあります。届いた論文をエディターがまずチェックします。この際、ジャーナルが求めている研究領域とは違うとか、あるいは形式が守られていないというような基本的なことから、

さらにジャーナルが求めるレベルに達していない場合には、エディターのところでリジェクトすることがあります。そこがクリアできれば、エディターはテーマに適切なレビュアーを探すことになります。一月ぐらいを目処にして、レビューをしてもらいます。

ジャーナルにもよりますが、評価項目というのがいくつかあり、レビュアーはそこにコメントを書き込み、最終判断を行います。アクセプト、マイナーリビジョン、メジャーリビジョン、リジェクトが示されます。必ずなぜリジェクトなのか、問題点は何か、リビジョンの場合はどこを直すべきなのか、コメントがレビュアーによって書き込まれます。レビュアーからのコメントが届いたところで、エディターが確認をします。レビュアーの判断が異なる場合はエディターが最終判断をします。1人がアクセプトで、もう1人がリジェクトというような極端なことはあまりありませんが、片方はリジェクトで片方はリビジョンということはよくあります。リビジョンの場合には、エディターは、レビュアー A、レビュアー Bそれぞれの指摘ポイントを投稿した人に示し、書き直した上で改めて投稿することを求めます。それで再提出された論文をもう一度レビュアーにチェックしてもらい、そこでアクセプトされるか、さらなる修正のコメントが来た場合、もう一度返すことになります。こういった一連のプロセスが、レビュープロセスです。長い場合は一年くらいかかることもありますが、レビュープロセスを経て、論文はブラッシュアップされます。このプロセスは、投稿者にとっても、レビュアー、エディターにとっても忍耐のいるプロセスになります。

もうひとつ付け加えておくと、コンファレンスペーパーというのがあります。学会によっては、アブストラクトだけをチェックして報告して良いよというものもあれば、ほぼフルペーパーに近いようなコンファレンスペーパーを求めることもあります。学会、国際会議の中で、それをそのまままとめて出版する場合がありますが、できればコンファレンスペーパーは、報告の際に受けた質問なども踏まえて、ジャーナルペーパーに書き直しましょう。コンファレンスペーパーのレビューは、ジャーナルよりも水準が低いのが一般的です。発表することが目的ですから。したがって、コンファレンスペーパーを出してアクセプトされて報告するにとどまらず、まとめ直し論文に仕上げましょう。その場合には、元々これはコンファレンスペーパーであったということは書いておく必要があります。

### 3.3 投稿前後の注意点

これは出版社 Emerald が出しているジャーナルレビューのポイントです。6つのポイントをみておきましょう。

①	Originality
②	Relationship to Literature
③	Methodology



④	Results
⑤	Implications for research, practice and/or society
⑥	Quality of Communication

- ①オリジナリティ：新しい有意な情報が含まれているか
  - ②文献レビュー：当該分野の関連文献が適切にカバーされ理解されているか
  - ③方法：適切な理論や概念に基づき、適切な方法が採用されているか
  - ④結果：分析の結果が適切に導かれているか
  - ⑤インプリケーション：研究に、実務にこのインプリケーションが示されているか
  - ⑥コミュニケーションの質：研究領域内での基本言語や知識に基づき表現されているか
- 先ほど 2.2 で示した論文の基本的構成の 7 つを、改めて確認しておきましょう。

さて次は、リジェクションへの対応です。レビューの結果、これは掲載できないというリジェクト。誰も望まない結果ですが、研究者である限りリジェクトは常につきまとうものです。

ここでいくつか注意しなければいけないことがあります。レビュアーは悪意があるわけではありませぬので、もし 2 人のレビュアーやエディターから問題があると指摘しているのであれば、やはりそこには何らかの問題があると思います。ですから、ここのジャーナルがダメだったから他のジャーナルに出そうという選択をいきなりするのではなく、何が問題なのかしっかりチェックし直しましょう。

まずはそのジャーナルが適切だったかどうかということ。それから、その領域の中できちんとした共通言語で書いているのかどうかということ。そしてそもそもそのリサーチクエスチョンが自分にとって面白いと思っても、アカデミック・コミュニティの中では別に大した問題でもない、他の人の関心と呼ばないようなことであれば、やはりそこは見直す必要があります。一人で悩むだけではなく、仲間や、先生に見てもらって、指摘された問題点をどう修正していくか、人と話をしながらチェックすることもいいと思います。もちろん最終的には自分で考え、忍耐強く、あきらめずに取り組まなければなりません。レビュアーのコメントを踏まえながら書き直す、再提出する時にはコメントに対して自分はこう直したということを書いて添付して送ると良いと思います。

以下は Crane et al (2017) が示している論文を投稿する前の 12 のチェックリストです。改めて確認しておきましょう。

- ①あなたの原稿はそのジャーナルの目的とか守備範囲に合っているか
- ②原稿は学術論文としての質を満たしているか
- ③原稿は十分に遂行されているか
- ④当該領域の研究に資するものであるか

- ⑤理論的な貢献があるか
- ⑥扱っている現象を理論的に説明できているか
- ⑦扱っているケースの地理的な文脈を超えた理論的分析ができているか  
(日本ではこうですと言うだけでは、いわば地域研究に終わってしまいます。共通の理論フレームワークの中で分析ができて、日本を超えて何らかのインプリケーションが示せているかどうかということが問われます。)
- ⑧調査・分析がリサーチクエスチョンと符合しているか
- ⑨質的研究の場合には、事例紹介に終わっていないか
- ⑩調査・分析の方法が適切であるか
- ⑪ジャーナルが求めている投稿要件を押さえているか  
(ジャーナルによっては、論文の要旨・キーワード以外に、この論文の目的、発見、オリジナリティ、インプリケーションなどを短く書かせるような場合もあります。ワード数を守っているか、図表のワード数換算なども含め、投稿要件をよく確認しましょう。)
- ⑫エディターやレビュアーと建設的なコミュニケーションができているか  
(レビュアーのコメントを受け、修正を加えて再提出していくプロセスを我慢強く、建設的に行っていくことです。)

## 4. 研究者に求められること

### 4.1 6つのポイント

研究者に求められるポイントを考えておきたいと思います。それは、①現実感覚、②哲学、③ディシプリン、④方法、⑤論理的思考、⑥倫理の6点です。

#### ①現実感覚

研究のための研究に陥らないためには、いま企業社会の中で何が問題になっているのかという現実感覚をしっかりとっておくことが大切です。ブームだからとか、あるいはデータが取りやすいからということで論文を書いていくと、だんだん続かなくなっていきます。

#### ②哲学

先の話とつながってきますが、なぜその問題を取り上げるのか、何を自分は明らかにしたいのか。現代の経済、社会、政治、国際的な潮流や背景を踏まえ、理解するベースが必要です。つまりただデータ分析するのではなく、社会学者としてその問題を取り上げる意味や意義をしっかりと考えることが大切です。

#### ③ディシプリン

先ほど指摘した通り、基本的なディシプリンを踏まえて研究をすすめていくことが求められます。

#### ④方法

定量的な方法も定性的な方法も、若い時にしっかりそのスキルを学ぶことが大事です。例えば統計的な方法も基本的な勉強をしたうえで、具体的な研究に沿ってそれにふさわしい方法は何かということを考えながら、あるいは研究仲間と相談しながらより高度な方法にチャレンジしていくということです。

#### ⑤論理的な思考

問題提起から最後の結論に至るまで、論理的な議論が積み重ねられているか。研究と実務の間で乖離が生じないように、エビデンスベースの研究を丁寧に行っていくことが求められます (Rousseau, 2006)。

#### ⑥研究倫理

出版にあたって、研究者は倫理的に取り組まなければなりません。例えばデータの捏造や改ざんによって都合の良い解釈をしたり、都合の悪いデータを消してしまうことなどは許されません。それから剽窃や二重投稿してはいけないなど、基本的なことはきちんと理解しておく必要があります。

最近あまりに統計的な分析の教育に偏りすぎている中で、現実感覚とか、現代社会の中での哲学的な思考とか、あるいは研究倫理ということが疎かになる現状がみられます。そこはしっかり意識して研究に取り組んでいかなければなりません。

また論文といっても、バラバラの論文ではなく、ひとつの体系の中で、今回の研究はAという部分について明らかにする、次はBという部分を明らかにするというように進めていくことは大事なことだと思います。物理学の分野でも、プロの研究者は一本の筋の通った一連の論文群を出すことで評価される、とされています (長谷川, 2015)。その上で、いま企業社会で問題となっているテーマについて自分なりの答えを出すことができるようになると思います。それを一冊の研究書としてまとめることにも意義があります。研究者は、常にアカデミックな世界と現実の世界の間で研究テーマを見極め、その間に橋を架けるような研究をしていくことが望まれます。

## 4.2 研究者とアカデミック・コミュニティ

それぞれみんな何らかの問題関心があって研究者になろうと頑張っていると思います。誰にも何か主張したいことがあるのですが、それが自分にとっては関心があることでも、他の人々が聞いたり読んだりする価値があるのか。さらに、それが当該研究領域の中できちんと伝わっているのか。論文の基本的な作成方法、コミュニケーション能力を身につけることはとても大切なことです。

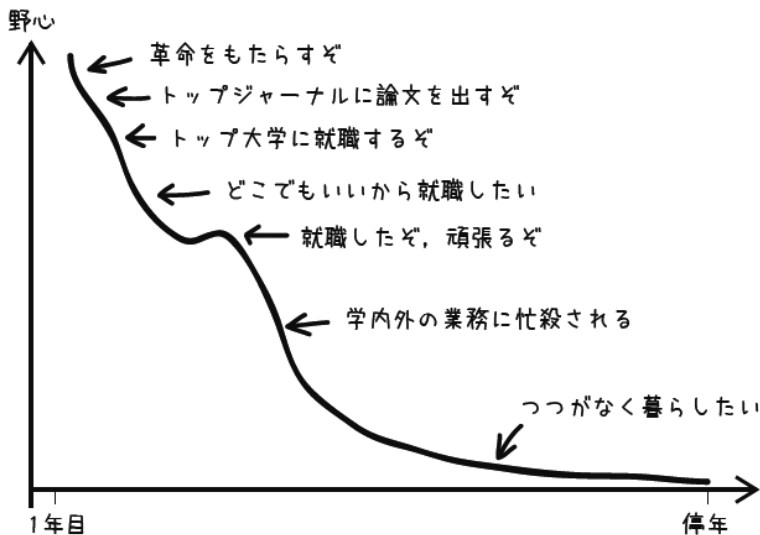
それから出版するということは、アカデミック・コミュニティの中でのコミュニケーションの一部であって、それが全てではないということです。論文を出版するだけではなく、ア

カデミック・コミュニティの中で議論し、役割を果たし、貢献していくことが求められます。例えば、レビュアーになる、ジャーナルのエディターになる、共同研究のチームをつくるあるいは参加する、学会や国際会議などの運営委員になる、ポスドクやサバティカルの研究者を受け入れる、海外の大学で客員教授として研究・教育を行うなど、将来いろいろな形でアカデミック・コミュニティに貢献できるように取り組んでいってほしいと思います。そのためにも、国内外のカンファレンスやドクトラルワークショップなどにも積極的に参加し、いろいろな人々と交流し、議論し、世界を広げ楽しむことです。

それぞれの研究を通して学界の発展に貢献する、さらに実務や政策に反映できるようになっていけば素晴らしいと思います。将来研究者として、自分の専門分野で企業と連携したり、政府の委員になったりすることもあるかもしれません。ただしそこで自分の立ち位置はしっかり理解し、一定の距離を常に保つということ、研究者として独立した立場を保つということがとても重要です。企業や政府の仕事を引き受ける中で、研究者としての独立性を失わないようにして欲しいと思います。ましてそれらの仕事を中心に、研究を忘れてしまうようなことになっては、本末転倒です。

研究者の仕事には、研究、教育の他に、大学・学部運営というアドミニの役割もあります。さらに政府、国際機関、企業、NGO などにかかわるいわゆる社会貢献の仕事もあります。若い頃は高い野心を持って研究していこうと頑張っていると思いますけれど、なかなか自分の思う通りにいかず論文が書けなかったり、就職しても学内外の仕事が忙しくだんだん研究のモチベーションが落ちてしまう、ということはよくある話です。コンスタントに研究を続

図2 研究者の野心の変化



出所：オリジナルは <http://phdcomics.com> より。加筆修正しています（谷本、2021、p.52）。

けていけるようモチベーションを常に高く持っていくことは容易なことではないのですが、図2のような右肩下がりのカーブではなくて、できるだけモチベーションをキープできるように、肉体的、精神的な健康を保つ努力も忘れずに、楽しみながら取り組んでいってほしいと思います。

最後に、今日のお話は2021年に出した『研究者が知っておきたいアカデミックな世界の作法—国際レベルの論文執筆と学会発表へのチャレンジ』（中央経済社）の一部をもとにしています。ここには、論文の書き方だけではなく、国際学会などでの発表の仕方についても触れていますので、関心のある人は是非参考にして下さい。

それからもう一つ。Elsevierという出版社のResearch Academyというウェブサイトがあります (<https://researchacademy.elsevier.com>)。ここでは、どのように研究費や助成金、奨学金を獲得するかということや、今日お話しした論文はどう書いたらいいか、ジャーナルに投稿して出版すること、さらに将来のキャリアパスについても解説しています。世界のいろんな人たちの解説やメッセージがビデオで紹介されたりもしていますので、一度のぞいてみるといいと思います。

## 参考文献

- Crane, A., Henriques, I., Husted, B. W. and Matten, D. (2016) “What Constitutes a Theoretical Contribution in the Business and Society Field?”, Editors’ Insight, *Business & Society*, Vol.55, No.6, pp.783-791.
- Crane, A., Henriques, I., Husted, B. and Matten, D. (2017) “Twelve Tips for Getting Published in Business & Society,” Editors’ Insight, *Business & Society*, Vol.56, No.1, pp.3-10.
- Devinney, T. M. (2014) “Publishing without Perishing”, Lecture at the Doctoral Workshop in the 6th International Conference on Corporate Sustainability and Responsibility, Humboldt University.
- Gastel, B. and Day, R. A. (2016) *How to Write and Publish a Scientific Paper*, 8th ed., Greenwood, Santa Barbara, California.
- Myrdal, G. (1972) “Response to Introduction”, *American Economic Journal*, Vol.62, No.2, pp.456-462.
- Rousseau, D. M. (2006) “Is There Such Thing as ‘Evidence-Based Management?’”, *Academy of Management Review*, Vol.31, No.2, pp.256-269.
- Schaltegger, S., Beckmann, M. and Hansen, E. G. (2013) “Transdisciplinarity in Corporate Sustainability: Mapping the Field”, *Business Strategy and the Environment*, Vol.22, Issue 4, pp.219-229.
- 谷本寛治 (2018) 「どのようにアカデミック・コミュニケーション能力を高めるか」(学界展望)『企業と社会フォーラム学会誌』No.7, pp.68-77.
- 谷本寛治 (2021) 『研究者が知っておきたいアカデミックな世界の作法—国際レベルの論文執筆と学会発表へのチャレンジ』中央経済社.
- 中谷安男 (2020) 『経済学・経営学のための英語論文の書き方—アクセプトされるポイントと戦略』中央経済社.
- 長谷川修司 (2015) 『研究者としてうまくやっていくには—組織の力を研究に活かす』講談社.